

高御座の来歴

◆所

功

京都産業大学教授

高御座（または高座）と書いてタカミクラと読む。最高の御座の意味であるが、具体的には即位式などに用いられる天皇の玉座にほかならない。現在これは京都御所の紫宸殿に据えられているが、今秋十一月十二日の平成即位礼には、それを東京へ移して使われる。

この高御座については、意外に研究が少なく、専論としては古代のそれを扱った和田萃氏の「タカミクラ―朝賀・即位式をめぐる一―」（『日本政治社会史研究』上巻所収、昭和59年刊）以外に見あたらない。ただ、『古事類苑』には朝賀・即位・大嘗祭などの項に係る史料が若干引用されており、宮内庁書陵部などに近世の記録や絵図も所蔵されている。それらに基づく詳細は別稿「高御座の絵図考証」（京都産業大学世界問題研究所紀要第十巻所載、平成2年7月刊）を執筆中にて、ここにはその要点を記させて頂こう。

（漢文はカナまじり書き下し文に直して引用する）

一 「高御座」の成立

高御座という用語は、記紀にみえないが、『続日本紀』の文武天皇元年（六九七）即位宣命に「天つ日嗣の高御座の業」とあり、以後歴代の即位宣命に登場する。しかし、それは連続と続く天皇の統治、ないし皇位そのものを象徴する表現であって、具体的な玉座を指すわけではない。

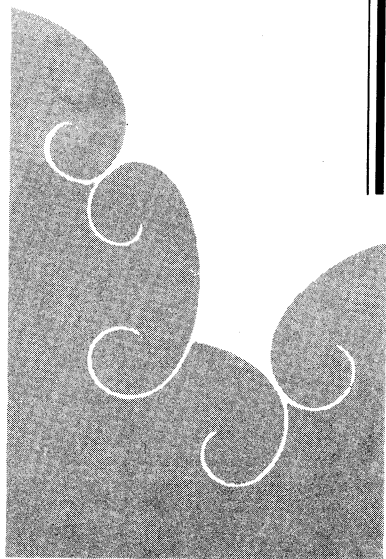
むしろ、即位式の設営として注目すべきは、『日本書紀』の雄略・清寧・武烈・孝徳・天武各天皇の即位記事にみえる「壇」「壇場」である。ただ、これを古写本は「タカミクラ」と訓んでいるが、「壇」は文字どおり土盛りの壇であろう。

ちなみに、『後漢書』光武帝紀に「有司ニ命ジ壇場ヲ設ク……」とあり、また『魏志』文帝紀に「魏王、壇ニ登リテ受禪ス。公卿・列侯・諸將・匈奴单于、四夷ノ朝セル者数万人、陪位ス。天地・五嶽・四瀆ヲ燎祭シ……皇々タル后帝（上帝）ニ昭告ス……」とみえる。後者は上帝より天命を受

けて「天子位」に即く「告天」の郊礼と考えられる（尾形勇氏「中国の即位儀礼」『東アジア世界における日本古代史講座』9所収、昭和57年刊）。その影響を受けたのか、『日本書紀』の雄略天皇即位記事に「天皇、有司ニ命ジ壇ヲ泊瀬ノ朝倉ニ設ケテ天皇位ニ即キ、遂ニ宮ヲ定ム。」とみえる。これによって、日本でもおそらく五世紀ころから、このような壇を設けてそこに登ることが即位儀礼となり、その壇場を中心に新帝の王宮が造られるようになったのではないかと思われる。

しかし、一代ごとの王宮遷替は天武天皇朝で終り、次の持統天皇朝から本格的な藤原京が営まれて大極殿を中心とする朝堂院が造られると、そこで正月の朝賀など、恒例・臨時の重要な儀式が行われるようになった。たとえば、『続日本紀』大宝元年（七〇一）正月朔条に、

「天皇、大極殿ニ御シ朝ヲ受ク。其ノ儀、正門ニ鳥形幢ヲ樹ツ。左ニ日像ト青龍・朱雀幡、右ニ月像ト玄武・白虎幡。蕃夷ノ使者、左右ニ陳



列ス。文物ノ儀、是ニ於テ備ハレリ。」

とみえ、慶雲四年(七〇七)七月の元明天皇即位条にも「天皇、大極殿ニ即位シ詔シテ曰ク……」とある。これは都が平城京や長岡京に遷されてからも変わらない。その大内裏の大極殿には、唐風の磚(煉瓦)を敷き詰めた床の上に、後述のような木製の繼壇を設け高御座を立てるようになった。その成立は藤原京の大宝ころまで溯る、とみて大過ないであろう。しかも、それは分解して移動できたらしく、『続日本紀』天平十六年(七四四)二月甲寅条には、「恭仁宮ノ高御座、并ビニ大楯ヲ難波宮ニ運ブ」と記されている。

二 平安時代の高御座

しかし、天皇が高御座に登って朝賀や即位の儀式をされたことが明確に知られるのは、平安朝に入ってからである。たとえば、弘仁十二年(八二一)に撰進された『内裏式』の「元正受群臣朝賀式」には、次のごとく記されている。

「前一日、御座ヲ大極殿ニ整へ設ケ、高座ニ敷クニ錦ヲ以テス。高座ノ壇下ノ南并ビニ東西ニ両面ヲ鋪キ……斑幔ヲ高座ノ左右ニ張ルナリ。皇后ノ御座ヲ高座ノ東幔ノ後ニ設ケ、褰幔ノ命婦ノ座ヲ高座ノ東西ニ丈ニ鋪ク。……」

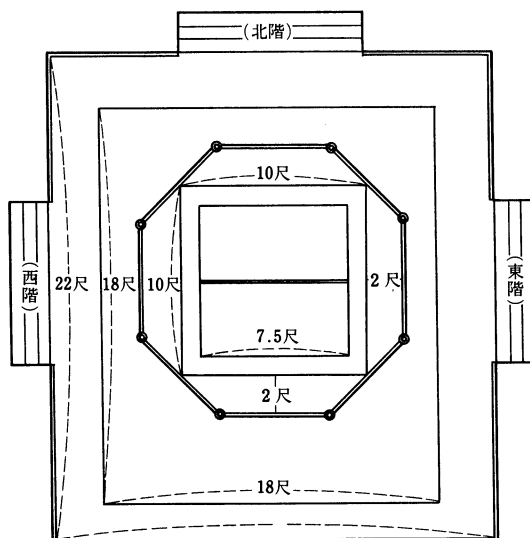
皇帝、冕服ヲ服シ高座ニ就ク。……皇后、礼服ヲ服シ後ニ御座ニ就ク。……御前ノ命婦二人、御帳ヲ褰ケ本座ニ復ス……宸儀(天皇の御姿)初メテ見ル。……」

この『内裏式』は、原本の半分近く散逸してお

り、「即位式」や「大嘗祭式」は短い逸文しかない(拙著『平安朝儀式書成立史の研究』第一章参照。昭和60年刊)。しかし、これには右の朝賀式文とほぼ同趣の即位式文があったであろうし(それを承けて貞観の『儀式』に「天皇即位儀」あり)、またそれが現に行われていたことは、二年後(弘仁十四年四月)の『淳和天皇御即位記』(『続群書類従』公事部所収)に「……皇帝、冕服ヲ服シ高座ニ就ク……」と明記されている。

では、当時の高御座はどのような形状であったのだろうか。この点に関しては、『延喜式』(九二七撰進、九六七施行)の内蔵寮式と内匠寮式、および平安後期の記録(清原頼業の『頼業記』、平信範の『兵範記』など)や『類聚雑要抄』、『文安御即位調度図』(共に群書類従所収)などが参考になる。このうち『延喜式』には左の(イ)~(オ)のような構成部分の数量のみで寸法が記載されていないけれども、他書により若干判明する。その数値を(イ)~(オ)の下へ√内に注記し、また繼壇と八角屋形の平面図を示そう。

- (イ) 鳳形 9 隻
 - 大鳳形 1 隻 (蓋の中央頂上)
 - △高さ 1 尺 7 寸 √
 - 小鳳形 8 隻 (八角葺手の上)
 - △高さ 1 尺 √
- (ロ) 順鏡 25 面
 - 大鏡 1 面 (蓋裏内の中央)
 - △径 1 尺 √
 - 小鏡 24 面 (八角博風上各 3 面)
 - △径 4 寸 √
- (ハ) 玉幡 8 流 (八角葺の下)
- (ニ) 玉冠甲 (掘物帽額) 16 条 (八面各 2 条)
 - △高さ 1 尺 √
- (ホ) 障子 (欄間) 12 枚 (表 韓紅花綾、裏 白綾)
 - (南北東西各 2 枚、他四面各 1 枚)



(イ) 帳 2 条 (表 浅紫綾、裏 緋綾) (八角屋形周囲の左右に各 1 条を廻し懸ける)

(ロ) 上敷両面 2 条 (……) (繻縹端の弘疊 2 枚、長さ 7 尺 5 寸、広さ 3 尺 6 寸 √)

(ハ) 下敷布帳 1 条 (……) (錦 1 帖、1 丈四方 √)

この高御座で最も注目すべきは、屋形が八角形になっていることであろう。これが日本独自のものか、中国の祭壇や仏教の須弥壇などの影響を受けたものか、今のところ確証できない。ただ、ここにこめられた意味は、和田萃氏(前掲論文)の

推測どおり、万葉人にも「八咫知之吾大王」と歌われた天皇が統べたもう「大八洲」を象徴している」と解すれば、そこへ劍璽を伴って登られることは、即位儀礼としてまことにふさわしいと考えられたにちがいない。

なお、幕末までの即位式には、天皇の登壇される高御座だけ設けられ、朝賀式のように皇后用の御帳台が置かれることはなかった。ただ平安時代にも、嘉承二年(一一〇七)五歳で即位された鳥羽幼帝の時など、母后の同昇した例は少なくない。また、治承四年(一一七七)大極殿が焼失して再建されなかつたので、以後の即位式には多く太政官庁が使われ、やがて後柏原天皇の永正十八年(一五二二)からは専ら紫宸殿が用いられている。(福山敏男氏『大極殿の研究』昭和32年刊、藤岡通夫氏『京都御所』昭和62年新訂版刊など参照)

三 江戸時代の高御座

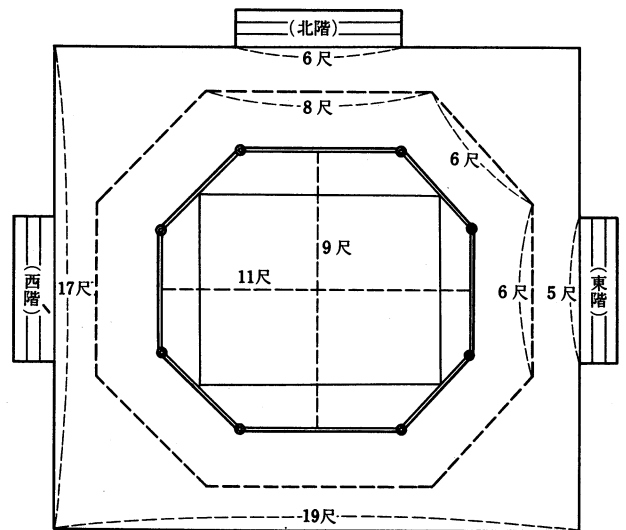
周知のごとく、大嘗祭は戦国時代の後柏原天皇朝から二百年以上中断して、江戸時代の貞享四年(一六八七)に一応再興され、元文三年(一七三八)から本格的に復興された。その間、即位式は遅延しながらも何とか紫宸殿で行われてきたが、そこで用いられた高御座がどんなものであったかを示す史料は見あたらない。

この高御座は、大嘗祭が再興されると、その節会にも使われた。壬生季連の『季連宿禰記』によれば、貞享四年十一月、大嘗祭に先立って、摂政一条冬経から節会について問われた際、

「高御座ノ内ノ御椅子、内侍所ト高卑ノ事、今度(朱塗)御椅子ノ方高ノ間、内侍所の浜床ノ下ニ高サ二尺余ノ台ヲ置キ浜床ヲ上げラル。件ノ台ハ今度修理職ニ仰セテ調進スル所ナリ。」と答えている。これは本来、辰・巳・午の三日間あつた節会を辰日のみに簡略化し、かつて御椅子の置かれた悠紀・主基の御帳台(御帳壇)なども省いたので、高御座の中に御椅子を置こうとしたところ、内侍所(神鏡を奉安する賢所)の床より高くなるため、後者の床下に二尺余の台を置いて御床揚げをすることになったのである。しかし、この高御座は宝永五年(一七〇八)の火災で内裏と共に焼失してしまつた。そこで幕府の援助により内裏の再建が始まり、翌年九月完成。そのさい高御座も新調され、同じ形のもの以後数代にわたり使われている。(途中明和八年再造)。ただ、その具体的な形状や寸法などまで示した宝永当時の記録が見あたらないため、数十年後のものであるが、

文政元年(一八一八)の『悠紀主基御帳壇御装束類之事』(壬生家記、『古事類苑』所引)に次のごとく記されている(前掲の(イ)~(ロ)に合わせて整理し表示した)。

- (イ) 金銅の大鳳1翼・小鳳8翼(蕨手の上)
- (ロ) 順光の鏡28面(軒先雲形の上)と金銅唐草16本
- (ハ) 金銅の玉幡8流
- (ニ) 蛇舌の帽類8枚
- (ホ) 青鎖(欄間)あり
- (ヘ) 御帷4帖(表 小葵紋紫の綾、裏 蘇芳の平絹)
- (ト) 帳中の畳2帖



- (イ) 帳中の錦1帖(紺地倭錦、裏 蘇芳平絹)
- (ロ) 柱(桁以下)の高さ9尺余
- (ハ) 壇上の床の高さ5尺
- (ニ) 高欄の高さ1丈余(尺カ)
- (ホ) 継壇の高さ3尺
- (ヘ) 壇四面の牙象形(南面正中……鳳、左右他……麒麟)
- (ト) 図の八角点線は八角屋根の軒の広さ(南北面8尺、他六面6尺)

これを平安時代の高御座に較べると、約30%小さい。ちなみに、荷田在満は元文三年稿『大嘗会儀式具釈』豊明節会次第に「藤原光忠卿ノ図説

(文安御即位調度図) ニミエタル昔ノ高御座ハ最モ玲瓏タル物ナリ。今ハサホドニハアラネド、ナホ金玉ヲ以テ飾リ丹青ヲ以テ綵リ……大略當時大社ノ神輿ニ似タリ。」と述べている。

そこで、盛時の高御座を復原するため、段々に様々の努力が払われた。その早い例とみられるのは、東山天皇の元禄中頃(一六九二〜九)である。宮内庁書陵部所蔵『高御座、惣絵図裝飾并丈尺寸法』によれば、出納従五位上中原職直が「嚴命ニ依リ家伝内記ヲ考ヘ新シク図画セシメ……丈尺寸法ニ至リテハ詳シク一卷ニ書シ……台覽ニ備フ」という。しかし、その絵図が現存せず、その寸法も精密ではない。

ついで、水戸光圀編『礼儀類典』の絵図(宝永七年八一七二〇〇〇)である。その冒頭には水戸藩絵師の桜井才次郎あたりが『文安御即位調度図』に基づいて考証加筆した極彩色の高御座が収められている(カラー参照)。

また、裏松固禪が寛政九年(一七九七)までに完成した『大内裏図考証』の巻三「高御座」や、平胤祿が文化十四年(一八一七)に提出した『高御座勘物』(国立公文書館所蔵)は、平安以来の儀式書や日記類から関係史料を抄録して、平安時代の高御座を考証したものである。ただ、後者の奥書に「但シ今度ハ(復原)建立サレズ、宝永已来ノ図ニ依リ新造セラル」と断っており、また同じ文化十四年とみられる権大納言正親町実光の意見案『高御座ヲ造ラルベキ事』(東大史料編纂所蔵)にも、「宝永新造ノ形」を「既ニ六代ノ嘉蹠」と評して

いるから、この仁孝天皇朝まで「旧記文」による復興は成らなかつたと考えざるをえない。

けれども、弘化四年(一八四七)孝明天皇の即位に際して、宝永以来の形を平安朝風に改められたようである。それを直接立証する記録はまだ管見に入らないが、宮内庁書陵部所蔵の『高御座帳中図』一卷に「弘化度被改」と注記されている。また事実、明治時代に描かれた維新前諸儀式取調懸編『公事録』の付図(北小路随光画)および宮内省編『孝明天皇紀』の付図(入江為守画、明治39年刊)所収の「即位図」(カラー参照)には、現行に近い形の高御座がみえる。しかも、京都近在の松島志夫氏が所蔵されている大きな軸装の高御座図(冷泉家旧蔵、カラー表紙参照)は、まさに弘化新造のそれを極彩色で描いたものとみてよく、右両付図も、これを参考にして描かれたのかもしれない。

四 大正復原の高御座

このように高御座は、幕末(弘化四年)に一たん平安朝様式を復興したとみられるが、まもなく安政元年(一八五四)の大火で紫宸殿と共に焼失してしまった。そのため、明治天皇の即位式(慶応四年〓明治元年)には簡素な御帳台(清涼殿の昼御座と同形)を代用されたのである。

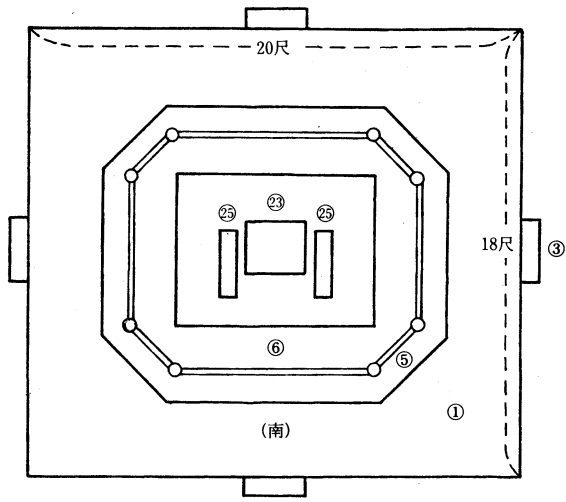
けれども、やがて明治四十二年(一九〇九)公布の『登極令』付式には、平安以来の諸史料、とりわけ江戸時代の絵図類を参考にして、高御座の詳細な仕様が明文化され、大正初年度それに基づいて復原造立されるに至った。その付式と『大札記

録』(大正八年刊)によって形状と寸法を示せば、別表の通りである(一尺〓約30cm)。

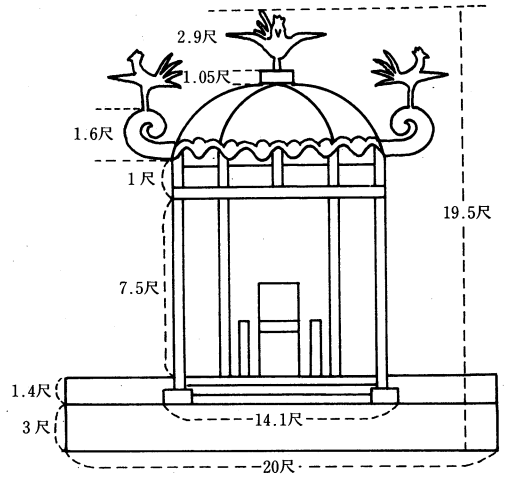
こうして復原された高御座は、江戸時代(宝暦〜文政)のそれに較べると、全体に約20%ほど広く高く造られており、裝飾も繊細で優美に仕あげられている。もっとも、平安時代のそれに較べると、継壇が少し狭くなっている。しかし、実はその置かれる紫宸殿が往時の大極殿より全体に約30%ほど小さいから、これでもむしろ大きすぎるほどであり、ただ紫宸殿前庭や南の承明門から仰ぎ見れば、うまく調和がとれているように感じられる。

なお、『登極令』付式により、新しく高御座の東方に皇后の御座として設けられることになった「御帳台」は、従来の簡素な御帳台と異り、材料も形状も裝飾も高御座と殆ど同じ立派なものである。ただ、高御座に比して、寸法を全体に約十分の一減じ、蓋上の靈鳥形を鸞(雞に似た鳳凰の一種)に改め、八角の小鳳や搏風の雲形・鏡類および蓋下の大円鏡を省くなど、少し控え目に作られている。今回、この御帳台も東京に運んで用いら

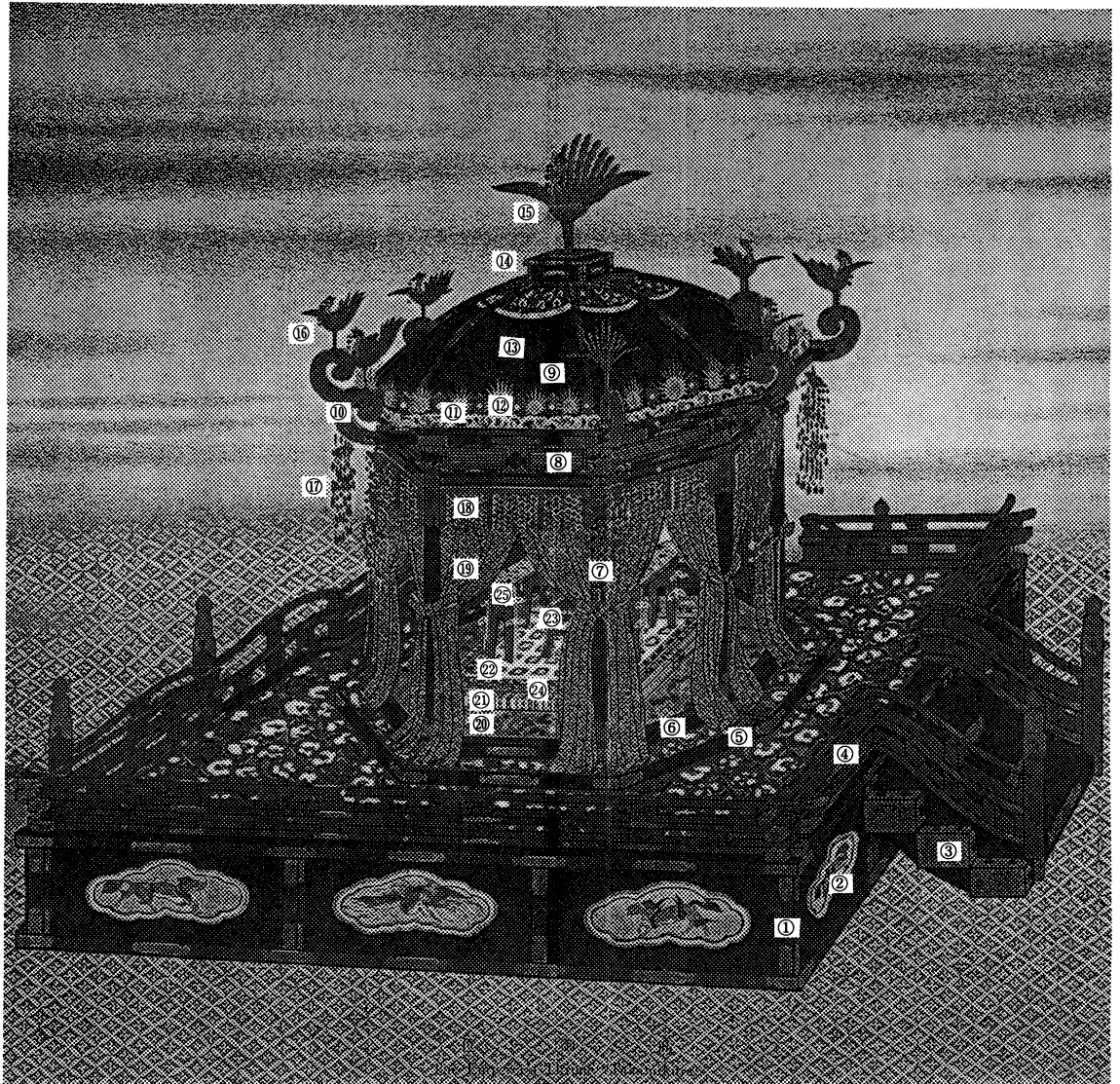
(平成二年二月二十三日稿)



平面略図



側面略図



大正復原の高御座 (梅戸在貞謹写『御大札画報』所載)

大正以来の高御座（各部分の概要と寸法）

①継壇一層	檜材・黒漆塗（高さ3.05尺，東西20尺，南北18尺）
②壇の四面	極彩色の眼像形（中央に鳳凰1翼，左右に麒麟各1頭）
③壇の階段	北階5級（広さ6.05尺，毎級高さ0.508尺，幅1尺），東西各3級
④壇周の高欄	朱漆蠟色塗（高さ1.4尺），各所の金具は金銅に彫鏤
⑤継壇二層	黒漆八角形（高さ0.4尺，東西14.1尺，南北11.95尺）
⑥継壇三層	黒漆八角形（高さ0.4尺，東西13.1尺，南北10.95尺）
⑦八角の柱	円柱，黒漆蠟色塗（長さ12尺，径0.45尺）（押下7.5尺，押高0.3尺）
⑧欄間（青瑣）	8面（高さ1尺）
⑨屋蓋	八角形黒漆（高さ2.9尺），八方の垂（1.4尺）
⑩棟端の蕨手	8本（上面幅0.26尺，側面0.45尺，反り高さ1.6尺）
⑪蓋端の搏風	8面・瑞雲形彫刻（高さ0.46尺）
⑫搏風上の鏡	<p>南北二面に各5面（中央に中鏡<径0.66尺>，左右に小鏡各2面<径0.47尺>）</p> <p>他の六面に各3面（中央に中鏡，左右に小鏡），中小合計28面（各々順光あり）</p> <p>各鏡両傍に金彫鏤八花唐草形（長さ0.6尺，幅0.35尺），白玉を嵌入（径0.26尺）</p>
⑬蓋下中央の大鏡	円鏡1面（径0.9尺，四方に帯あり），御椅子頭上の本匡に嵌す
⑭蓋上中央の露盤	4面に眼象形責鎖（高さ1.05尺，東西2.3尺，南北2.2尺）
⑮露盤上の大鳳凰	一翼（高さ2.9尺，張翅広さ4.5尺，南向き）瑤珞を銜む
⑯棟端の小鳳凰	八翼（高さ1.2尺，張翅広さ1.58尺，外向き）瑤珞を銜む
⑰棟端下の玉旛	八角に各1旛（長さ3.5尺，幅1尺余）金銅笠形
⑱長押下の帽額	26枚（南北面に各4枚，他の6面に各3枚），金銅彫鏤の唐草形（長さ1.365尺），蛇舌（幅0.185尺）
⑲八面の御帳	深紫綾地文葵・裏緋の帛（長さ9.3尺，広さ五幅物4条と四幅物4条）
⑳第三層の敷物	青地牡丹文の錦
㉑第一・第二層の敷物	赤地牡丹文の錦（北側階段の敷物も同じ）
㉒縹緗緑の畳	2枚（長さ各7.6尺，幅2.75尺，厚さ0.3尺，縁0.22尺，東西が妻）
㉓畳上の敷物	<p>大和錦（青地菱文）縁龍鬘の上敷1枚（長さ5.3尺，幅4.5尺，縁0.6尺）</p> <p>大和軟錦と東京錦の毯代各1枚（東西4.95尺，南北3.63尺）</p>
㉔御椅子	鳥井式直方形杳目蠟色螺鈿入，肱掛勾欄形（高さ3.3尺，笠木3.12尺，床面門口と奥行1.95尺，床面下1.24尺）
㉕牀上の敷物	縹緗緑の畳と白地菱文の御褥1枚（共に0.27尺）
㉖螺鈿の剣壺案	2脚，黒漆蠟色塗（長さ2.55尺，長さ1.625尺，幅0.94尺）東＝御剣，西＝御玉

※継壇の下四方に布単・両面錦（東西31.16尺，南北31尺），北階より後房までの筵道に二幅の布単と両面錦（長さ316.8尺）を敷く。 <以上，寸法は尺に統一>